

Department of Policy and Planning Sciences

Discussion Paper Series

No.1380

社会工学オーラル・ヒストリー：川崎由紀子（事務職員）

(PPS Oral History: Yukiko Kawasaki, former official)

by

黒田 翔 島田夏美

(Sho KURODA and Natsumi SHIMADA)

February 2022

UNIVERSITY OF TSUKUBA

Tsukuba, Ibaraki 305-8573

JAPAN

社会工学オーラル・ヒストリー:川崎由紀子(事務職員)

○ 語り手

川崎由紀子 氏

○ インタビュー日時

第1回 2018年6月20日 於:筑波大学

第2回 2018年7月4日 於:筑波大学

第3回 2018年9月3日 於:筑波大学

○ 聞き手

島田夏美 筑波大学大学院システム情報工学研究科(当時)

辻本隆宏 筑波大学大学院システム情報工学研究科(当時)

○ 編集者

黒田 翔 筑波大学大学院システム情報工学研究科 E-mail: s1530138@u.tsukuba.ac.jp

島田夏美 筑波大学大学院システム情報工学研究科(当時)

○ 概要

本稿は川崎由紀子氏のオーラル・ヒストリー(口述史)であり、筑波大学社会工学関連組織(社会工学類、社会工学専攻、社会工学域。略称は「社工」)の歴史を記録することを目的とした「社会工学オーラル・ヒストリープロジェクト」として、大学院生を中心とした有志のグループが企画・実施したものである。

なお、本稿の校正において吉瀬章子先生(システム情報系長)より貴重なコメントをいただいた。記して謝意を表す。

○ 社工

1975年に社会工学系(研究組織)、および博士課程計量計画学専攻(当初は社会科学研究所、のちに社会工学研究科として独立)が設置される。翌年に経営・政策科学研究科が設置され、1977年には第三学群社会工学類に第1期生が入学する。その後、大学院や学群の改組・再編を経て、現行の主な組織は以下の通り。

- ・ 理工学群社会工学類(学士課程)
 - 社会経済システム主専攻、経営工学主専攻、都市計画主専攻
- ・ 理工情報生命学術院システム情報工学研究群(大学院課程)
 - (博士前期課程)社会工学学位プログラム、サービス工学学位プログラム
 - (博士後期課程)社会工学学位プログラム
- ・ システム情報系社会工学域(教員組織)

○ 語り手の略歴

川崎由紀子(かわさき・ゆきこ)

北海道札幌市生まれ。本籍は岡山県。親の転勤に伴い各地へ。茨城県立竜ヶ崎第一高等学校卒。川崎医療短期大学医療秘書科(倉敷市)卒。国家公務員初級合格後、1979年(昭和54年)、筑波大学に文部事務官として入職。以来、附属病院、筑波技術大学、保健管理センター、経営・政策科学研究科/専攻事務室、社会工学専攻事務室などで事務職員として勤務する。2018年3月、退職(主治医の勧めもあり、定年の1年前に早期退職)。退職後は、国立科学博物館筑波実験植物園のボランティア・ガイドの修業中。



2018年9月3日 撮影:島田

○ インタビュー

(編集者注)全3回にわたるインタビューで貴重なご経験・エピソードを数多くお聞きすることができましたが、その全てを文字起こしたところ計131ページとなりました。都合上、本オール・ヒストリーへの掲載を断念した内容が数多くあることを付記します。

筑波大学に就職

— 社工を担当されるまでの川崎さんの経緯を、ご説明いただけないかなと。よろしくお願いします。

川崎 まず、なぜ筑波大に就職したかということから始めましょう。筑波大学の事務には、国家公務員の試験に合格して入ってきたんですね。今は、国立大学の事務職員になるための試験があつて、関東甲信越のように地区で区切られてるんです。それに合格した人が関東甲信越の大学に配属されるみたいな感じだと思います。ただ、私のときは、国家公務員の初級、中級、上級っていうのがあつて、私は、初級で関東甲信越地区を受けて合格しました。

— 川崎さん自身は、お生まれは？

川崎 生まれたのは、北海道札幌市で。その後、親の転勤で転々としてるんですよ。国立大学の受験に失敗して、医療短大に進学して、そこで「診療情報管理」という分野に出会いました。私、診療情報管理士の資格を持っています。その短大のときに、その当時、国内で診療情報管理の最先端のグループに入っていたのが、筑波大学の附属病院。見学に来て、すごいなと思って。まだその当時、あんまり開発されてない分野だったので。どうせ仕事するなら、筑波大の附属病院の病歴室で働きたいなと。

— 何年頃ですか。

川崎 昭和54年ですね。見学に来たのは、53年。試験を受けたのも53年。国家公務員の初級も、倍率は高いので。その当時、岡山に住んでいたんだけど、筆記が通って、面接で東京に来て。それで面接のときに、他の人とグループ面接になるんだけど。みんな、私は財務省に行きたいとか、私は農林省に行きたいとかって言うのに、私1人、「文部省の筑波大学の附属病院の病歴室に行きたいんです」って言ったら、今まで面接した中で、あなたみたいな人は初めてですって言われて、なんでですかって言われたんで、「診療情報管理の仕事に興味があつて、今、国内では最先端のことをやっているの、そこで働きたいと思います」って言ったら、ほーって面接官に言われました。

— でも、その時点で確定ということではないんですよね。

川崎 それで、ただ、あなたが行きたいと言っても、まず文部省が、あなたに興味を示すかどうか分からないよって話で。合格したら名簿ができるので、そういうふうな希望を出してることが書かれた名簿を見た筑波大学があなたに目を止めて、声が掛かれば、チャンスはありますねって言われたんです。

それで、国家公務員の合格の通知が来て、あとは、待つだけなんです。そしたら、何件か電話がかかってきて、その中に筑波大学があったんです。

— 筑波大学に来ませんかってことなんですか？

川崎 そのときには、筑波大学の面接も、全員受かるわけじゃないから。筑波大学に面接に来たわけです、土浦からバスに乗って。集団面接で、四大出た人とかが、私は会計系をやりたいですとか、私は学務をやりたいですって言うてるのに、私は「附属病院の病歴室で診療情報管理やりたいです」って言ったら、はあ、みたいな感じで。

— それで、念願の部署へ配属されたんですね。

川崎 OK になって。そのまんま、本当にそこに配属されたわけです。だから、岡山時代の友達に言わせると、すごいねって言われた。試験で言って、スパッとその部署に入るって。

— まずは附属病院に配属されたんですね。

川崎 筑波大学に採用が内定したのが、12月か1月かな。昭和54(1979)年4月1日付で採用になりました。筑波大の中央図書館開館の年だったんで、同期で図書館職の中級、上級の人が20人ぐらいいたかな。附属病院に配属になったのは、私1人。

筑波は最先端

— 川崎さんが入られた附属病院は最先端だったんですね。

川崎 うん。もう、画期的なことやってた。

— それ、どんなふうに当時、違ったんですか。

川崎 すごく狭い話になりますが、今でこそ、カルテって電子化されているけど、昔は紙だったわ

けです。診療科ごとにカルテがあるっていうイメージ。私は岡山で大学病院に研修に行ってたんだけど、たとえば、診療科ごとにカルテがあるわけ。川崎さんが皮膚科にかかりました、第1内科にかかりました、第2内科にかかりました、産婦人科にかかりました。それぞれの科に、カルテがあります。番号も違ってたりする。でも、番号同じだけど違うカルテだったりすることもあったんです。1人1カルテっていう概念がなかったのね、昔は。

— 統一されてなかったんですね。

川崎 ところが、筑波大の附属病院は、開院のときから、1患者、1カルテ、1ID。

— それ自体が、もう当時としては珍しいことだったんですね。

川崎 入院しても同一ID。昔は、入院番号っていうのがあって。たとえば、川崎さんがある病院に入院したとしたら、外来の番号は変わらないんだけど、1回目の入院と2回目の入院で入院番号が違ふ。それをインデックスする、要するに、たどっていく必要があるわけ。川崎さんが救急車で運ばれて緊急入院したときに、この人のID何って言ったら、外来のIDはありますけど、入院のIDはありませんとかって言われると、病歴室の人が出てこない、入院のIDは分からないとか。

— むちゃくちゃ大事なポジションですね。

川崎 あと、病名の分類でICD分類っていう、WHOの国際疾病分類があって。外来患者も入院患者も、番号で分類して。たとえば、外来で病名が付いたら、コードを付けて。入院の病名にもコードを付けて。それらを全部集約して、同じ病気の人リストを作るとか、インデックスを作るっていうことをしてました。

病歴室の主な業務は“物の管理”、“情報の管理”、“病名の分類”。“病名の分類”は、カルテの中を読んで、病名の番号を付けるコーディング。たとえば、心疾患でも狭心症と心筋梗塞とではコードが違ふとか。胃がんでも、手術した／しないでコードがちょっと変わる。もうちょっと進化してくると、胃がんでも、化学療法をした／しないで細かく分類。今でこそ普通にやってるけど、あの当時は、そういうふうには細かく分類をして、パッとすぐ出せるっていうのは、あんまりなかったです。

— そういう意味では、筑波大は既に新しい取り組みをしていたんですね。

川崎 いろんな新しい取り組みをどんどんやってて。

— 公務員に受かった方にとっては、筑波大は魅力的だったんですか。

川崎 私は、公務員になるっていうよりも、筑波大に行きたかったから、公務員試験受けたんです。

— そうなんですね。

次の配属先

— 附属病院からどんな経緯で経営政策¹に來られたんですか。

川崎 まず、附属病院の病歴室で仕事してましたね。物の管理からコーディング、カルテを見てコード付けて、分類して、それ入力してとかっていうのを通算 11 年ぐらい。その間、1 回附属病院から出てるんですよ。筑波大の事務の規則で、一つの部署に長くいちゃいけないっていうのがあって。最初 6 年いたときに、ちょっと出て下さいって言われて、第 2 事務区(現・人間エリア支援室)の普通の事務(心身・障害学系事務室)へ異動しました。そのときに私が、すごい抵抗して。私はこの仕事をやりたくて筑波大に就職したのに、人事異動はしたくないと。ごねたら、別の部署の知り合いから「若いうちには、他を見たほうがいいぞ。今のままじゃ、井の中の蛙になっちゃうから。せつかく総合大学にいるんだから、別のところ見たほうがいいよ」って言われて。後でそれが正しい意見だということが分かりました。

— それで 3 年やって、また附属病院に戻っていいよっていうふうになったっていう……。

川崎 戻っていいよっていうか、早く戻ってこいっていう現場の意見。

— そういうふうに言われる人材になりたいです。

川崎 その当時は資格²を持つてる人が少なかったの。

— 勤務場所というか、そういうのは選べないんですか。

川崎 事務の枠に入っちゃうと、基本的には選べません。病院は特殊なだけけれども、筑波大の事務としては、全部同じ事務職で入ってるから。スペシャリストでも何でもないから。資格持つてるなんて、関係ないわけです。

— 先日、技術職員をされていた川上(彰)さんにもこのようにお話を伺いまして³。技術職員だった

¹ 経営・政策科学研究科(通称「経政」)は 1976 年に発足。2005 年にシステム情報工学研究科の専攻に改組し、2014 年に募集終了。

² 診療情報管理士：現在、筑波大学附属病院では、技術職員として公募・採用している。

³ Department of Policy and Planning Sciences Discussion Paper Series No.1356 「社会工学オーラル・ヒストリー：川上彰(技術職

ので、事務職員とは違って40年同じ部署にいらしたとお伺いして。

川崎 そう、技術職員は異動がないんですよ。

— 事務の方はいろいろ異動してっていう形なんですね。

川崎 なぜ経政に12年いたかっていうのは、それはまた後でね。

次の配属先(2)

— 次が経政ではないんですね。

川崎 附属病院2回目の勤務が終わった後、技術大学の診療所に行ったんです。

— 筑波技術大学ですね。

川崎 鍼、灸もやってる附属診療所(現・東西医学統合医療センター)に行っていたんです。「川崎さん一つのところに長く居過ぎたから、また出てね」って言われて、附属病院から出されました。

— 出てねって、筑波大学の外じゃないですか。

川崎 外だけど、あそこの人事権は、筑波大と一緒になんです。

— そうなんですか。知らなかった。

川崎 技大の診療所には6年いました。その間に、頸椎の手術をしたんです。

— そこで、やられちゃったんですね(川崎さんの首のカラー(固定具)を指して)。

川崎 それで、また、附属病院から戻ってこいという動きがあったわけです。

— それって、戻れるんですね。

川崎 頸椎を手術したときの主治医が2人いるんだけど、2人とも私が附属病院の病歴室にいると

員)」(<http://infoshako.sk.tsukuba.ac.jp/~databank/pdf/1356.pdf>)

きに、一緒に仕事をした整形のドクターで。附属病院から戻ってという話が来てますって 2 人に言ったら、やめろ。「川崎さんは、にこにこしながら残業するだろう。あんなどこ行って、倒れて休んで人に迷惑を掛けるの、性分で嫌だろう」って言うから、嫌だって言ったら、「じゃあ駄目だ、戻るな」って言われて。

それで、結局戻らずに。人事に附属病院の勤務は無理だと主治医に言われましたのでということ、年に 1 回の身上調書に書いて出したら、ホケカンに行けっていうことに。

次の配属先(3)

— ホケカン！ 保健管理センターですね。健康診断のときにお世話になる。

川崎 それで、ホケカンに行ったわけです。

— 技術大からホケカンに。

川崎 技術大診療所もホケカンも、事務で配属されたんだけど、病院に比べて規模が小さいので何でもやりました。技大では、受付、会計(現金取扱)、レセプト(保険請求)、薬剤の在庫管理など。ホケカンでは、受付、職員レセプトなど。もちろん、カルテ管理は専門なので、技大では、カルテ、X 線フィルム、脳波、心電図、いろんなデータ管理を一から整えました。ホケカンでは、古いカルテを整理しました。

— どこ行っても求められる人材ってすごいですね。誰でもできることじゃないと思うんですけど。

川崎 ちゃんとやらなきゃ気が済まない性分。でも、私、できないことは、できないってはっきり言いますよ。「川崎さん、これ知ってる？」と聞かれると、知らなければ「知りません、分かりません」って、できないものは、できないってはっきり言う。

— 自分の領域に関しては……。

川崎 とことんやらないと気が済まない。技大ではカルテ類が、なんでこんなぐちゃぐちゃなのって言って、ナンバリングのシールを買って、予測を立ててスペース確保して、棚を配置して資料整理する。そういうのは、嫌いじゃないから。私は病名のコーディングも好きだけど、ものを分類して管理するの、好きなんです。

— それが、筑波大に来る前から、やりたい、ご自身の関心にマッチしてたってということでしょうか。

川崎 そうですね。

パワーが落ちた!?

川崎 そうこうしてるうちに、技大にいた 1996 年ごろから首が悪くなって、手術しなくちゃいけなくなった(1997 年 2 月に頸椎椎弓形成術)。ちょうど会計システムの入れ替えがあって、倒れそうとか言ってたら、技大診療所の整形外科医が主治医だから、「大丈夫、俺がストップ掛けてやるから。ストップ掛けるまでは、できるぞ」って言われて。

— 残業とかは、すごかったんですか。

川崎 残業は……。でも今思えば、経政の末期に比べれば(笑)、そうでもなかったかな。ただ、体調が良くなかったのも。頸椎の手術する前と後では、私かなりパワー落ちてるから。首の手術する前の私を知ってる人からは、パワー落ちたねって言われる。

— 私たちはインタビューしながらも、パワーを頂いていますが。

川崎 だいぶ落ちてるって言われますね。

— 筑波大の病院に入りたくて、公務員試験受けられたわけですよね。それで念願の部署に戻っておいでって言われて。

川崎 首の手術したから。

— それがなければ、じゃあ……。

川崎 首の手術してなかったら、多分戻ったと思う。だってかなりパワー落ちちゃったから附属病院の仕事は、自分ではもう無理だと思った。

— 激務だから。

川崎 激務だから。どう考えても、普通に考えても無理。附属病院の業務は、桁違いだから。

— やはり手術がなければ、戻っていたんですね。

川崎 首の手術をした時点で、もう勉強はやめました。それまでは、一応病院に戻るかもしれないと

診療情報管理士の勉強会に参加したりとか、友達ルートで資料を取り寄せたりとか。でも、パッとやめました。だから、今はもう診療情報管理士ですって名乗ってない。「だった」って過去形。勉強続けてないといけないから。今、診療情報管理士を持ってるんだったら、仕事は、いくらでもあります。絶対数が足りないから。

— 潔いですね。それはもうフォローアップしてなかったら、生き残れないとか、やっていけない世界なんですか。

川崎 やっていけない世界なので。もうスパッと勉強やめました。ホケカンでも、ちょっと残業とかがあつて、主治医が「もういい加減にしろ。残業のないところへ行け」と。で、残業のないところを希望と、毎年の身上調書に書いていました。ホケカンには3年半いました。

— それを書けるんですね。主治医が言ってます、と。

川崎 主治医が言ってますと書き続けていたらある日、内示ですって呼ばれて、経営・政策科学研究科ですって言われて。

次の配属先は、経政？

— どこですかって。

川崎 どこになるんですかって。そこで初めて、経政が出てくるんですね。それで経政に行ってみたら、何も分からない。学生の相手、単位の計算、単位の確認、論文のチェック、論文の提出、留学生の相手、全然分かんない。

— 経政でバリバリ仕事しているイメージでしたが、川崎さんにもそんな時代があったんですね。

川崎 その当時の経政研究科は、社工のほうとは別ものだったんですよ。独立修士課程の経政研究科に社工の先生方が出向いてくるっていう感覚。

— 今までカルテの管理だったのが、学生の相手とか、もう全然違うことになるわけじゃないですか。まず何を始めたんですか。

川崎 業務として最初にやったのは、事務室の中の片付け。見出し付けて分類。そのとき、当時の同僚によく言われたんだけど、「川崎さんと仕事すると、利用頻度とか、アクティブとかインアクティブとか、そういう単語好きだね」って。たとえば、文房具とかが棚にぐっちゃぐちゃに入ってるわけ。

それで、学生さんはこのドアから入ってくるんだから、学生関係のものは縦のライン 1 本にまとめようって言って。その中でも一番利用頻度が高いものは、手の高さでしょって。そこから利用頻度が少ない順に上に上げていけばって。次に、学生さんが借りに来るものを、次の 2 列に置こう。利用頻度が高いものを下にして、頻度が低いものを上に置いてく。事務しか使わないものは、一番向こう側の列で、事務は取りやすいようにしてっていう。

事務室の隣に経政図書室あったの覚えてますか？

— ありましたね。

川崎 あそこも片付けましたね。事務室に比べたら、そんなに片付けてないけど。アクティブなものは手前とか。学生さんが取り出す機会が多いものとかは、手前。

— それ、当時必要とされる仕事量は、今まで配属されていた場所よりは抑え気味の場所だったんですか。

川崎 抑えめだった。だって、あの規模の事務で、常勤が 2 人いて。ま、定時では帰れなかったけど。学生さん、授業 6 時までであるから。

経営・政策科学研究科っていうのは、筑波大の割と早い時期から立ち上がっていて、すごく伝統があるって言われていて。最初のころはほとんどが派遣の人、それも公務員だけでなく、民間企業からも。そういう修了生の結束もすごくあって。歴史ある経営・政策科学っていうことが言われてましたね。

私が異動してきた 2002 年頃に、大研究科構想が動き始めていて、筑波大学の大学院を大研究科にまとめようっていう話で、平成 17(2005)年 4 月に独立修士課程 経営・政策科学研究科からシステム情報工学研究科経営・政策科学専攻になったんだけど、歴史ある経営政策を改組するのはいかなものか、という話もあったらしいです。大学としては、修士の研究科も全部なくすという方針で。でも、東京教育大学からの伝統を引き継いでいる修士課程“教育研究科”だけは特例として今(2018 年時点。2020 年に教育学学位プログラム(前期)に再編)も残ってますね。

— シス情に入るにあたって、体制として大きく変わったことはありましたか。

川崎 経政研究科っていうのは、独立していて、いろいろと本部と交渉してたから。専攻になると、シス情の下に入るから、発言権も弱くなるし、力も弱くなるし、お金も直接は来ないし。

— じゃあ、研究科として、独立してたときは、全然別物になったと。

川崎 全然違う。それまでは経政研究科で独自にいろんなことをやってたんだけど。経政専攻

になってからは、あくまでもシス情のルールで動くことに。それから社工と絡んでくるので、社工のルールとかにもどんどん巻き込まれていって。だから、独立研究科のときに比べると、ちょっと小さくなっちゃったかな。

— お仕事の量とかも増えた。

川崎 人が減った上に仕事が増えた。経政研究科では事務の常勤2人だったんだけど、専攻になると1人しか残せないって。もうひとりの方が私より先に経政にいたので、順番どおりに出します、川崎さんは残ってくださいって言われました。

JICA

川崎 経政の留学生で、JICA(国際協力機構)の話を。

— JICAの学生っていうのは、JICA経由で留学生が入ってくるっていう話なんですか。

川崎 この当時はJICAは二種類あって、一つは、個人で受験して合格して、「JICAの奨学金(個別)」で在籍していたパターン。この人達は日本語ペラペラ。その後も何年かはいました。もう一つは、経営政策に「JICA専用のプログラム」を立ち上げて、英語で学位が取れますっていうもの。私は2002年10月異動だったんだけど、JICAのこのプログラムの留学生たちも10月に研究生3名が入ってきて、2003年4月から正規生としてその3名が入学。

このプログラムについてJICAといろんなことがありました。このプログラムの学生は、ほとんど日本語がしゃべれないから、だから、経政は基本的に日英併記だったでしょ。あれは、JICAがきっかけで、全部日英併記になった。

— すごいサポートしてもらってたんですね。

川崎 日本語できない学生は、できるだけサポートしようっていう方針。日英併記でいろんなことやってるからっていうので、他専攻や他研究科の留学生が経政の授業を受けにきたりとかもありましたね。

— 今はいろんなところで当たり前英語表記とか、当たり前ですけど。でも、最先端だったんですね。留学生が多かったからとか、そういうことでもなく、JICAがあったから。

川崎 きっかけはJICA。JICAとの契約で、掲示や通知は日英併記するっていう条件があった。だから、メールとかも日英でやりますよね。その当時は、あれだけ完璧に日英併記やってるところはな

いって言われましたね。

— そんなことがあったんですね、経政は。英訳担当の事務の方も入って……。

川崎 英訳担当の人が週に2回来てました。週に2日、経政図書室に1名勤務でした。

改組再編後の変化

川崎 それから、研究科から専攻に改組して、受験者数が激減しました。経政研究科のときは、入試が10月だったのに、経政専攻になったら、入試が8月に変更。8月に入試やったときに、随分少なくなったって思ったら、10月の入試を目掛けて他大学から受験を希望していた人達もいたんですよ。それから、何人かの学生が言っていたんだけど、シス情研究科経政専攻だと、外から見えない。どうもアピールが足りなかったらしくて、他大学とか他学類からの進学が減ってきた。

それまでは、学類でいえば、国際総合とか数学とか社会とか、そういうところからも何人か来てたし、あと、私立大学とか、結構他大学からも来てたけれども。他学類、他大学からの進学が、激減しましたね。

— ここで組織が変わってから、ずっと激減した。

川崎 ここで受験者数が落ちたまま。やはり、外から見にくくなった影響もあるんじゃないかと思いました。先生方が分析してましたけど、この入試のタイミングが変わっただけじゃないよねって。これは、一応アピールはしてたわけで。システム情報工学研究科っていうのは、何？ 経営政策は伝統があるかもしれないけど、システム情報って何？って。

某県庁に採用になった人が、MPP(公共政策)修了で、その人が県庁のシステム系の部署に配属されて、それで私に電話かけてきて、「システム情報工学研究科修了っていうので、システム関係の仕事になっちゃった。私がやりたいのは公共政策なのに」と。

— 大きな変化だったんですね。

川崎 ここでかなり流れが変わっちゃいました。学生が変わると、中の雰囲気も変わるから。それから、派遣が減りました。派遣は、その当時の情勢っていうのかな。あまり、派遣を出すような雰囲気でなくなってきたんですね。

— 大学じゃないって、ご時勢として。

川崎 各地の県庁とかからも、毎年来てたのに、派遣ゼロになっちゃった。

— 僕(2013年度入学)の知ってる経政と全然雰囲気が違うなあと。

川崎 多分、派遣の最後が 2005 年度入学者の古川(俊一)先生のとときかな。古川先生が亡くなったときの最後の学年に、某県庁からの最後の派遣の人がいて、「うちの県はもう派遣やめました」って言ってた。

— 派遣自体をやめた。

川崎 行くんだったら、自腹で。夜間でも。それから、1年で学位が取れるコースが、東京にできたんだよね。

— 六本木にある政策研究大学院大学(GRIPS)ですかね。

川崎 そう。あそこに、派遣のための1年のコース⁴ができた。国家公務員の人が、1年で学位取れて、なおかつ、東京ということで、国家公務員の派遣が経政にパタッと来なくなったわけです。

指導教員が決まっていない

川崎 あと、指導教員が決まっていなくて入学することも経政の特徴って言われてましたね。

— 社工の大学院は入学するときに既に指導教員が決まっていますね。

川崎 入学願書で、経政専攻は指導教員欄は空欄でも可って書いてありました。

指導教員が決まってないというのは、特徴の一つでもあったのね。指導教員決めなくても、中に入って1学期、2学期の授業を受けて、自分の方向性が定まったら指導教員を決めましょうっていう。社会学類からの進学だと、学類のときについている先生について、そのままっていうケースが多い。でも、他大学から来ると、指導教員とのコンタクトが取れない、取りにくいっていうのがあって。経政研究科のときには、派遣の人や、他大学・他学類出身者が多いということがあって、その人たちの指導教員を見つけるのは大変だったわけですね。

昔は、経政専攻と、社シス(社会システム工学)専攻と、社シマ(社会システム・マネジメント)専攻と、三つの合同修了式、同じ日にやりました。経政専攻ってみんなワイワイやるんだけど、社シス専攻って横つながりが薄いから、修了式っていってもそこまで感動がないんだって。博士後期課程

⁴ 政策研究大学院大学 教育プログラム(<https://www.grips.ac.jp/jp/education/index/>)

の社シマ専攻なんか、ましてやそうだね。経政って、1年のときからみんな同じ授業受けたり、学習室があったり。

— 経政は全然違いますね。

川崎 指導教員にとらわれてないから、学生さんにとってはいいところもあるんですよ、指導教員が決まってないって。事務の負担が大きくなるけれども。今でも、経政の卒業生って東京でよく飲み会やってるって聞きますね。

— そういう話、聞きますよね。いまだにやっているっていう話。確かに、ファミリー感はずい強かった気がします。

川崎 どういう経緯かは分からないけども、指導教員を決めなくても入試受けていいですよ。入ってから1年次の12月に決まるまでは、指導教員は決まらないままでいいですよっていうのが、魅力の一つではあった。

そうすると、専攻事務が、そのフワフワした学生の面倒を見る。たとえば、奨学金の推薦書とかは、指導教員が書かなきゃいけないんだけど、指導教員は決まってないから。事務上の指導教員ということで、顧問教員というシステムがあったんですよ。年間10人ずつ先生方に顧問教員を割り振って、1回やった先生は次のサイクルまでは連続してやらないっていう、顧問教員の一覧表チェックみたいなのがありました。そうすると、顧問教員の先生と仲よくなっちゃう学生もいれば、顧問教員とは全然関わらずに事務室にベッタリ来る子もいるし。

指導教員が決まってないと、中ぶらりんなんだよね。他学類、他大学、派遣がゼロになって留学生が増えてくると、何していいか分からないみたいな学生も多くなってくる。そうすると、指導教員が12月に決まるまで、なんか中ぶらりん。

それから、先生方に希望を出したの覚えてる？ 11月ぐらいに希望を出すんだよね。そうすると、集中しちゃうんだよね。偏っちゃうんだよね。

— 一部の先生に。

川崎 そうすると、来てほしいのに来ない先生とかもいるじゃない。自分のとこにいっぱい来ちゃう先生もいるじゃない。

— という難点があったんですか。

川崎 特に、特定課題研究は、すごく人気のある先生とそうでない先生の差が激しくて。学生、教員それぞれに不満があって、それで、それぞれが事務室に来て、なんだかんだ言うのを聞き役して

ました。

留学生の増加

— 少し話が戻ります。JICA プログラムが終わったあとも、留学生が増えてったっていうのは。

川崎 昔から留学生の受験者の数はあんまり変わらない。他大学、他学類が減っちゃったから……。

— 相対的に入れるようになって。

川崎 入れるようになっちゃった。それでまた友達とか親戚とかを呼ぶんですよ、ここなら入れるぞって。

— そうなんですね。

川崎 でも、いい学生に来てもらいたいから、いかに魅力的なプログラムを作るかっていうので、特定課題研究にバリエーションをつけたりとか、いろいろアピールしたりとかっていうね。高木英明先生の発案で、いい学生に来てもらうにはどうするかっていろいろ考えて、ピンポイントで、レベルが高い日本語学校だけに説明に向いて、以後の専攻長も同様に説明会に出掛けてましたね。

とはいっても、留学生はどうしても手が掛かるので。研究生から上がってきた留学生はいいんですけど、日本語学校から入ってきたり、他大学から入ってきた留学生なんかは、全部、事務室が面倒を見ることに。

— どこからどこまでやってたんですか。

川崎 判らなったら事務室においでって言ってたから。事務室のドア、いつも開けっ放しにしてたから。

留学生との“バトル”

— 留学生の方が増える前からそういうシステムだから、もともと面倒見る機会が多かったけれども、留学生の方が増えたことで、より対応する時間が増えた。

川崎 そうですね。いい留学生さんのほうが圧倒的に多いんですけど、中には、くせのある学生さんも。留学生の物語だけで山ほどあります。留学生と“バトル”するのに慣れてました。

とある先生が言った名言なんだけど、島国の農耕民族と大陸の狩猟民族は、根本が違う。たとえ

ば、同じアジア人でも、日本人、中国人、韓国人はそれぞれ違う。悪い意味じゃなくて、価値観が違うということ。食べ物を得るためには、戦わないと食べ物を得られない。でも日本人は、みんなで仲よくしてお米を育てようね、みんなで仲よくして野菜を育てようね、みんなで仲よくしてイノシシ捕まえようねという。

— 外敵にさらされることがなかった。

川崎 だから、価値観の違う人たちとうまくやっていくのが苦手な人も少なくない。

— それ、最前線に立つのが川崎さんということになるんですね、システム上。

川崎 システム上そうだし。留学生センターは留学生に関係する全学の事務を司っているけど、細かいことは専攻で対応してくださいと。たとえば、指導教員が決まっている学生に対しても、先生方が「判らなかつたら経政事務に聞いて」って言って、それを、ほいほいって私が対応しちゃったから。一般的な事務の人からすると、私はやりすぎだと言われてたので。支援室とかも、そこまでやらなくてもいいんじゃないって言うんだけど。支援室だと、末端の現場から離れてるし。ある時、授業料未納の留学生が、支援室に行って、授業料が払えないとかってバトルしたときに、手に負えないから、川崎さん来てくださって呼ばれて。経政の学生には期限過ぎても授業料を払わないのが毎年数名いるから。そうすると、最後、支援室で大バトルを何回かやって。そのときに、支援室の人たちがびっくりしたって。川崎さん、日々あんなことやってるの？ そうですよ。

— 日々、最前線で戦ってたわけなんですね。

川崎 日本人でも授業料を期限過ぎても払わない学生とは戦いましたね。

留学生の対応は、経政で技を磨いたので、ホケカンに戻ったときにとても役に立ちましたね。留学生の対応でこじれたら、みんな私を呼ぶんですよ。「川崎さん、内科に来てください」「川崎さん、窓口お願いします」。いつも言ってたんだけど、「こじれてから呼ばないで、こじれる前に呼んで」って。そしたら、「いや、やるだけやってみただけど、通じなかったから川崎さんと呼んだ」。

— そこがもう、川崎さんの一つの特徴になってたんですね。

川崎 そう。留学生のトラブル対応は、経政で磨かれた技です。

— ちなみに、その留学生のトラブルは、経政ならではなくて、多分どこでも。

川崎 うん。あると思う。

— そこに真摯に向き合ってきた1人が川崎さんだったってということなんですね。

川崎 逃げないから。

— 知らないって言って逃げることはできない。

川崎 できない。悲しい性分。

長い目で見ると

川崎 長い目で、広い目で見たら、日本のいいところを、世界の優秀な人に知ってほしいなっていうね。たとえば、筑波に留学しているアフリカの人たちって仲が良くて、それが、ずっと帰国してからも続いていて。特に経営政策にいた学生には、MEXT(文部科学省奨学金、いわゆる国費留学生)で来る有職者とか、あるいは既に、大学を卒業して社会人になってから MEXT 受けて来ていた人がいました。MEXT の試験自体難しいそうで、現地で MEXT の試験に受かるまでに3回受けましたとか。

— 本当に優秀。

川崎 現在はどうなっているかわかりませんが、私が担当していた経政 2002～2013 年入学の MEXT の人はみんな優秀でしたね。それで、向こうの国に帰ってから、長い目で見たら、アフリカの横つながりができてくるって、すごいスケールの大きな話でしょう。

— 無茶苦茶、大事な話ですね。

川崎 たとえば、経政を修了してから社工で博士をとってアフリカ開発銀行に行った留学生がいて、インタビューで、「Tsukuba, it's my root, my hometown」って⁵。こんな感じで、長い目で見て、筑波大が何を貢献できるかを考えたときに、MEXT の学生を引き受けるってことはこういうことにつながっていく、という話をいろんな先生がしていました。

— 川崎さん自身が、大学をこうしたい、とかつてありましたか。MEXT の学生を増やしたいとか。

川崎 MEXT の学生は増やしたいと思いましたね。私が担当した経政の MEXT の学生、本当にい

⁵ Tsukuba Alumni, Dr. Raymond Zate Zoukpo, 2015年9月5日 <<https://www.tsukuba.ac.jp/journal/alumni/20150905185932.html>>

い学生ばかりだったし。

— 長い目で見ると。

川崎 長い目で見ると、筑波大が何を貢献できるのか。事務のおばさんが言うことじゃないけど、筑波大が何か、世間に対していいことできるっていったら、いわゆる発展途上国の人たちに来てもらって、つくばを見てもらって、日本を知ってもらって、ここでお友だちを作ってもらって勉強してもらって、母国に帰ったときに、日本といい関係とかそういうのを作ってくれるっていう。何かそのお手伝いができるっていいなあと思いましたね。MEXT で、メキシコの学生がいて、メキシコに工場がある日本の会社に就職して、僕は将来メキシコと日本の懸け橋になるって言ってたから。

— そういうスケールのことが起きてるんですね。

川崎 実際に、そう。それから、MEXT 以外にも、カザフスタン政府奨学金、インドネシア政府奨学金など自国政府の奨学金で来ている留学生もいました。彼らは、帰国後、現地の日系企業に就職したりして、日本との接点が続いているようです。

とある留学生は、卒業して3年か4年たったとき、平日のある日、5時過ぎに、いきなり経政事務室に入ってきて、私が彼の名前を言ったら、「川崎さん、僕の名前覚えててくれたの」って言って、2人でハグして。私が「ちょっと待って、なんでここにいるの？ あなた母国に帰って銀行に勤めるって言ってたでしょう。帰ってからメールくれるって言ってたけどメールくれなかったじゃない」と言ったら、彼は「ごめんなさい」って言って名刺を出した。「私、こういうものです」。駐日大使館。

— え！？

川崎 「きょう、僕は、筑波大学に仕事があったんです。そして、筑波大学に行けると思ったら、川崎さんに会えると思いました。でも、これはびっくりさせようと思いました。なので、内緒で来ました。筑波大学で打ち合わせをしていたら、時計を見たら5時でした。川崎さん、帰っちゃうかもしれない。これはまずい。打ち合わせ、抜けてきました。」

— めっちゃ嬉しいですね。

川崎 めっちゃ嬉しかった。その何年前にも、JICA 奨学金(個別)で来た学生で、僕は数年後に駐日大使館勤務で戻ってくると思いますって言ってた学生もいたし、それ以外にも、現地の日本大使館勤務になった学生もいましたね。

これからの日本との友好関係とか考えると、筑波大ってこれだけ留学生がいるでしょう。先を見て、日本とその国との友好とかまで考えて、留学生を育てていくっていう視点は、あってもいいと思う。も

ちろん今もあると思うんだけど。一介の事務のおばさんだけど、それは思いましたね。筑波大学が貢献できることっていったら、留学生を通した日本との友好。

東日本大震災（2011）震災当日から直後

川崎 経政事務室の隣の図書室で、英語担当の非常勤の方と打合せをしているときにダダダダって始まって机の下に潜って、ちょっと止んだなっていうときに、図書室から廊下に出たら、ふらふらと専攻長室から吉田あつし先生が出てこられて「あっ、あつし先生、生きてる！」って感じでしたね。

その後、建物の外に出て、文科系修士棟の中庭に経政専攻、教育研究科、国際地域研究専攻（人文社会科学研究科）の学生さんたちが一緒に集まって。たまたま常勤職員でいたのは私だけで、私の周りにみんな集まっちゃって。経政は帰国しない留学生が端末室にたむろってたから多かった。シス情支援室も外に出ていて、学生は解散させてもいいのって聞いたら「まだ方針決まらない。宿舎もどうなってるか分からないから、取りあえず今、集まってるんだったら、学内で身の安全確保してください」と。

— そのとき、大学の構内情報、全然分かんない。

川崎 そう。何回か支援室に聞きにいったら「取りあえず日没になる前に学生は解散させよう」ということになって、経政事務室からお菓子を持ち出してきたから、みんな、持てるだけお菓子持って行ってと。

— それで解散した。

川崎 その後が大変だった。留学生は、みんな帰国しちゃった。母国から成田に迎いの飛行機（アメリカ、カザフスタンなど）が来たり、中国からの私費留学生で、電車乗り継いで関西に行って関空から帰った人もいました。

この地震の影響で、留学生は特に、辞めた人もいます。「家族を説得できませんでした。僕は日本に戻りたいけども、家族が福島隣の茨城は駄目だって言ってる」って言って、退学の手続きした人もいたし。入学するはずだったんだけども、入学を辞退した人もいました。

— 大変な3月、4月だったんですよね。連絡つかない学生に連絡したり。

川崎 学生全員の安否確認をやりました。それも含め震災関係は全部記録にして専用ファイルを作って残してあります。あのとき、社工のサーバーは早めに復旧したけど、文科系修士棟は立ち入り禁止で、安全確認が取れるまでは入らないくださいって言われて。私の携帯から全員にメール

グリストでばんばん毎日、情報流してたら、みんな私の携帯アドレスに「今、成田空港にいます」とか、直接送ってきてました。

事務の役割

— 先ほど、学生、教員それぞれに不満があって、それで、それぞれが事務室に来て、なんだかんだ言うのを聞き役してたという話がありましたが、それは、職域にとどまらないって
いうか。

川崎 そう。だから、すごく言われた。

— それは、本部とか。

川崎 本部じゃなくて、先生とかに言われた。川崎さん、やり過ぎって。支援室にも言われた。そこまでやることはないって。

— 確かに。楽しいですか、業務自体とか、人と関わるとかっていうのは。

川崎 現場が好きっていうか、人と関わるのが好きっていうのはあるかもしれない。

— 引き受けて、整えて、叱りつけて。

川崎 ただ、それが気に食わない人もいっぱいいるわけで。

— そうかもしれません。

川崎 でも、やらなきゃいけないことはやるっていうのが、責任感っていうか。非常勤の人に責任がないという意味ではないんだけど、常勤職員としての責任があるじゃない。5時15分になったから帰りますって言ってずっと仕事を積み残していくわけにはいかない。たとえば、KdB（教育課程編成支援システム）の修正入力期限があったら、残業してでも処理をして間に合わせないと、他の学内のルールに合わせられないことになる。やっぱり常勤職員が最後は事務処理のチェックをしなくちゃいけないっていうのはあるんだけど。

— 常勤としての責任感というか。

川崎 常勤としての責任感っていうのはあったと思いますね。非常勤職員が、多かったから

ね。でも、経政は非常勤職員にすごく恵まれて、いろんな人に助けてもらって。

— いろんな事務の方とお話するときに、知らない、分からないって言われることって結構多かったんですよね。そういう方が一般的な事務だと思うんですけども、そういう方ともめたりとか、事務同士でもめたりとかはありましたか。そこまでやらなくていいよ、みたいなのはありましたか。

川崎 少なくとも経政事務は、途中から常勤は私 1 人だったし。非常勤の人もいたけど、非常勤の人ともめたことはなかったですね。ただ、先生方ともめたり。

— それ、どんな場面であるんですか。言える範囲で。

川崎 先生方にしてみれば、私が介入しちゃうから。たとえば、泣きながら来る学生とか、いるわけですよ。そうすると、話を聞いてあげて、先生と橋渡ししようかなって。でも、それは事務の仕事じゃないでしょって。

— 事務室の隣の図書室に。

川崎 そうそう、泣いた学生にね。専攻長とやり合った学生を、専攻長が、あと川崎さんよろしくって専攻長室からやって来たら、その学生を隣の図書室に連れて行って、ティッシュ、ポンって渡して。そこは専攻長と私で、あらかじめ役割分担はしているので。専攻長が泣かせちゃったら、フォローは私がしてた。

— 内容が大きすぎて、事務の方に頼ることではない気もしますが……。

川崎 いいの。事務のおばさんは、何でも聞く係だから。事務所のドアいつも開けてたでしょ。私は、とにかく何となくみんなとつながっていたっていうのがあるから。ポツンとした学生さんをつくりたくなかったから。だから、いつもドアは開けてたし、なんかあったらおいでって言って。論文提出寸前に経政事務室に入ってきて、ドアパタッと閉めて、わーって泣いたのも何人かいましたね。

— それを、他の先生方から見ると、それはちょっとやりすぎだろうっていうのが一つではあった。

川崎 そう思ってる先生もいたみたいね。

MEXT(文部科学省奨学金、いわゆる国費留学生)の受け入れ

川崎 留学生の受け入れについても、MEXT＝国費留学生の受け入れは手続きがいろいろ煩雑

なんです。国費留学生って経政専攻を志願してくる人が多いんですよ。外国から見て、「社会学」って判りにくいんだよね。東工大も「社工」って言ってるのかな？

— 社会学を冠する組織としては、もう終わっちゃいました。

川崎 社会学が判りにくいとか、取っつきやすい経政に問い合わせが来ることが多いので、経政で、MEXT＝国費留学生の窓口を一本化しようって。私が 2002 年に経政に異動してくる前の松田(紀之)先生の時から MEXT の窓口は社工全体で一本化したほうがいいっていう考えがあつて。対外的に見て判りやすくして、いい留学生に来てもらうためにということで、専攻の留学生委員会ができてきた。三専攻で窓口になる E メールアドレスを作って、三専攻の英語のホームページから、留学生委員会のほうに誘導して。研究内容とかを留学生委員会の先生が見て、この研究内容だと××先生で、専攻をどれにするかはその先生に決めてもらおう、みたいな感じでやってた。これは、三専攻長が了承の上で留学生委員会の某先生と私で結構グイグイやってたんだけど、面白く思わない先生がいっぱいいたんだって。

— どうしてですか。

川崎 なんでそれを経政事務がやるんだって。

教員と事務

— ずっと、アカデミアとか教育、研究組織にいた人では、もしかしたら見えにくい視点かもしれないです。留学生の対応一つ取っても思うんですけど。教員と事務の方で協働しなければいけない場面って、多々あるわけじゃないですか。そもそも、大学の教員と事務の方々の関係性ってどんなものなんだろうって、学生側からは分からない。たとえば、対等に付き合ってますよ、もあれば、理不尽な主従関係もあるんですよ、みたいな。ことあるごとにバトるような関係なんですよ、もしくは、いや、全然平和ですよっていうのは、全く分からず。

川崎 先生方には決定権はあるけれども、事務に決定権はない。事務は基本、指示待ち。だから、そこが事務の弱いところでもあり。先生方の要求というのは、たとえば、こういうことがやりたいから事務のルールを変えて、とか。事務的にこの話はできませんって言うと、それはおかしいだろうっていう話になって、よくもめましたね。事務が教員を指図するとか言われました。先生が無茶苦茶なことを言ってきたりすることもあるわけだけど、組織上は主従関係ではないんだよね。事務組織って全く別だから。事務はローテーションで動いてるので、たまたま私が経政にいた、たまたま移転したあとの社工事務にいたっていうだけで。だけど、先生方は、社工に入ったらずっと社工じゃない。でも、事務はどんどん人が入れ変わるから。事務のルールに則ってできないことはできませんってことを

言って、もめるわけ。そっか、学生さんから見ると、先生と事務の関係っていうのは分かりにくいかもね。

非常勤講師の手続き

川崎 これだけの非常勤教師、客員教員は、多分、他の専攻にはないでしょう。有職者というか、現場でやってる人が。

— ないでしょう。

川崎 これは、経政の特徴。経政というか、社会工学の特徴ですね。

— 経政のときからの連携。

川崎 「ビジネス英語」「リーダーシップ」など経政らしい授業がありましたね。

— 「ビジネス戦略:理論と実践」はリレー講義で、経営のプロの人たちばかりで、経政らしかった。

川崎 いずれも非常勤講師の先生方による授業でしたね。経政の授業の特徴の一つが非常勤講師が多種多様であることで、一般企業の方が多かったし、現職の公務員の方もいました。また、他専攻からの受講希望も多くて、8A108(文科系修士棟の階段教室、約60名収容)に入りきれないこともありました。ビジネス英語、ビジネス倫理、リーダーシップ。この3科目は、特に他専攻の受講希望者が多かったのですが、経政専攻以外は受講不可としてました。それでも「聴講だけでも」とたくさん問い合わせがあって、専攻長の判断で「1人認めると全員認めないといけなくなっちゃうから、不公平になるからできません」と説明してました。非常勤講師の先生方の対応には気を遣いました。採用時の書類の煩雑さ、日程調整、当日対応など、とにかく失礼があってはいけなかったので。

非常勤講師は枠⁶(専攻毎に、時間数と予算)が決まっているし、採用時には大学で資格審査があり、そのためにたくさんの書類を提出していただくことになるわけです。大学のルールにあわせて作成して頂くので、普通の有職者の方だと何度も書き直していただくんです。非常勤講師、客員教員(交流協定に基づくもの。経政専攻では、国交省(授業枠は局別)や三菱地所)は、学内審査に通って辞令が出たら専攻のHPに記載され、ご本人は“肩書き”として履歴書や名刺にも記載できるわけです。

⁶ 他専攻では、非常勤講師を科目単位(1単位:15時間 or 2単位=30時間)で雇用していたため、非常勤講師は年間10名以下。経政専攻では、①科目単位での雇用、②1単位あたりの時間数を割って(最小1.5時間)多人数の非常勤講師を雇用、③交流協定に基づく客員教員。①~③あわせて年間30~40名。

— これ、非常勤の方とか授業の内容を決めるのは先生たちで、そのあと川崎さんに、連絡よろしく、みたいな感じなんですか。

川崎 非常勤講師が決まると採用手続きをするのですが、とにかく煩雑な書類作成なので、最初だけ世話人の先生に CC 入れて、あとは事務的な手続きをさせていただきますということにして川崎が担当してました。私が残業理由に「非常勤講師、客員教員の事務処理」と記載すると、当時の支援室(事務)の担当者から注意されてた。でも現場は、そんなことは言っていないから。

— 線引きは難しいですよね。主観による部分も多いですよね。

川崎 じゃあ誰が線引きをするかっていうと、明確な線引きはなくて。だから、専攻事務のあり方としてどういう位置付けをするかという、支援室側についてるか、教員側についてるか。私はどちらかという現場で、教員側についていたわけで。

吉田あつし先生【2009～2010 年度、経政専攻長】

川崎 では、吉田あつし先生の話。

これが著書の『日本の医療のなにが問題か』(NTT 出版、2009 年)。この本は評判が高くて、これを機に厚労省とかいろんなところで呼ばれ始めたんですね。後書きに、Mr.Children の話が書いてあって、吉田あつし先生の奥さまが、「これは、あつしらしいって」言ったので、私、先生が亡くなった後に連絡あった人には、これをコピペして送ってました。

あつし先生は単身赴任で、ご家族は大阪で、経政の専攻長のときも、「川崎さん、きょう帰るから。帰って来いコールが来ました」って。それでうちに帰ったら、奥さまにいかに川崎さんが怖いかって力説してたそうなんです。

(2012 年)1 月下旬のちょうど大阪に帰っている日曜に体調に異変をきたして、私の携帯に電話が入りました。それから、いろんなことがあって翌日の月曜には附属病院に緊急入院になったわけです。火曜の夜に初めて奥さまに会って、帰ったらすぐ奥さまからメールが来て「あつしは川崎さんを頼れと言っています」って。

— すごいですね、それでもう。

川崎 それから、奥さまと仲良くなったわけです。そのときに奥さまに言われたのが、「川崎さんが優しくするとおかしいから、怖いままでいてください」って。

— 吉田先生に対して。

川崎 付き添ってる奥さまから、メールで「ちょっと川崎さん、あつしがわがまま言っているから、ちょっと喝入れに来てあげて」。「分かりました」。

— すごいですね。

川崎 それで、仕事終わったら病院行って、「先生、何？奥さんにこんなこと言ったんだって。それは何？ どういうこと？」って。

— それをあつし先生が、はい、はい、と。

古川俊一先生【2005～2006 年度、経政研究科長／専攻長】

川崎 古川先生のと きも そうだった。誰にも会いたくないけど、川崎さんだけ来てって言われて 2 回ぐらい面会に行きました。「訳の分からないうちに入院しちゃったんでね、今の位置関係が分からないんですよ。富士山はどっち方向ですか？」、「先生から見て左手が富士山の方向ですよ」とか、もともと古川先生はギャグばかり言う人で、「先生、酸素吸入しているのにギャグ言うのやめてくださいよ～」とか話していました。

古川先生は家族だけで密葬にするっていうことでした。そしたら、大学側が、それじゃあ収まらないっていうことで、大学として献花の場を設けることになり、経政のゼミ室に先生の写真を飾って、1 週間ぐらい設定しました。

私、古川先生の献花と吉田あつし先生のお葬式と 2 回仕切ったから、何でもできます。

— 単純な疑問なんですけど、そういうお葬式とかは事務の方がするんじゃないですよ。

川崎 違いますね。

— でも、そこはもう人と人のお付き合いで、そこまでやっちゃってるんですもんね。

川崎 古川先生の献花はシス情の研究科としてやったので、準備するときは総務の人も手伝ってくれました。お花が連日たくさん届いて、1 週間毎日、お花を入れ替えたりとかってというのは、全部、私 1 人で担当しました。記帳もしてもらって、終了後にメッセージと一緒にご家族に届けました。吉田先生のお通夜とお葬式は何百人もいらして。。。シス情総務の人や社工の教員も、受付とか手伝ってくれました。でも、亡くなったことに対して、みんな納得がいかないこともあってか、あちこちでいろいろあって、それをまあまああってなだめて歩いて。私は元締めだから。

— 元締め。それはそうですね。

川崎 亡くなった直後に奥さまが言ったの。「川崎さん、お葬式よろしく」。奥様は大阪に拠点があるわけで、大学の関係者も分からないから。

管理職は複数体制がいい

川崎 古川先生のお話もいろいろあるんだけど。これだけは言っておきたいということがあって、管理職は複数体制がいい。

— 管理職は複数体制がいい。

川崎 古川先生が経政の専攻長で、体調が悪くなって、(2006年)3月中旬に附属病院に緊急入院したときに、その当時の研究科長が、専攻長代行⁷を立てましようということになり高木(英明)先生が専攻長代行になりました。その後、古川先生が4月14日にお亡くなりになって・・・そしたら、シス情研究科長の熊谷良雄先生に呼び出されて「川崎さん、専攻長が亡くなったときには研究科長が代理になるという大学の規則があるので、明日からは私が専攻長代理になります」って。私は古川先生が亡くなったショックと、みんながあちこちからいろんなことを言ってきて、でも、泣いてられないって。そのときからですよ、「影の専攻長」って言われ始めたのは。

— 川崎さんがそれまで以上にサポートしてらっしゃったんですね。2006年4月。

川崎 そう。亡くなった次の日から、専攻長は熊谷先生になったんですよ。

— でも、実際には……。

川崎 専攻長にサブをつけるとか、専攻長に何かあったときには(実質的に)誰が代行するとかっていうのを決めておかないと。

それで、専攻長に死なれたら困るっていうのが、そのときからの私の口癖。吉田あつし先生が「私は死ぬわけにいかない。川崎さんがついた先生が死んじゃうっていう伝説ができちゃうから」って言ってました。

経政事務室は、前は(第2エリアの)文科系修士棟で、離れ小島だったからね。それで専攻長が死んじゃうと、やっぱり大変、対応できないっていう感じだから。そこから川崎さんが怖い人に変化していったっていう。

⁷ 専攻長代行：研究科長の判断で代行を置く。辞令はなく、研究科長の予算から、代行の教員に専攻長手当相当分を使用替するとのことであった。

専攻長代理：大学の正式な規則に基づき、研究科長が代理となる。辞令あり。

— 「影の専攻長」と呼ばれるのにはそういう秘話があったんですね。

川崎 秘話だか、何だかね。吉田あつし先生が亡くなったのは、専攻長終わってからなんだよね。震災のときには専攻長だったんだけど、亡くなったのは震災の丸 1 年後の 3 月だった。吉田先生は 5 月に仕事復帰予定ってということで動いていて、訃報が流れたときにみんなが私にがーって言ってきて。古川先生も吉田先生も、入院していても 2 人とも前向き。だって、2 人とも仕事復帰の話ばっかりしてたもん、入院中で大変な状況でも。2 人ともギャグばかり言ってるし。私も、本人達がそういうふうにいるんだったら、それをサポートするぞって感じだったから。

吉田あつし先生は私に、「川崎さん、今回の闘病記出版して印税入ったら、川崎さんにフルコースをおごってあげるから。懐石料理もね」って言ってたんだけど。

古川先生:専攻長とのペア

川崎 でも、「影の専攻長」って言われ始めたのは、古川先生のことがあったからだと思う。もうあのときは、私、本当にポツンとあっち(文科系修士棟)に 1 人で、専攻長代理となった熊谷研究科長にしてみても、まさかね、自分のところの専攻長が亡くなるなんて思わないし。古川先生だって、古川先生のご家族も言ってたけど、まさか死ぬとは思ってなかったでしょうね。私も思ってなかったし。古川先生は、3 月 17 日に入院して、4 月の 14 日に亡くなられて。。

年度始めだったこともあって、その頃、私はもう泣いてられないみたいな感じで。私が気を張ってやらないと。

— そこを奮い立たせる原動力みたいなのが、単純にすごいな、うらやましいなっていう。

川崎 たとえば、古川先生と私は、専攻長と常勤職員で仕事のパートナー。古川先生の奥さまや娘さんとお話したら、「最後の 1 年ぐらいは、多分、私たち家族としゃべった時間より、川崎さんとしゃべってた時間のほうが長いです」って。

— 忙しい。

川崎 専攻長って物凄く忙しい。そうやって 1 対 1 で組んで仕事してて、その先生が突然に入院して亡くなられたら、もうやるしかないじゃん。泣いてられない。もう奮い立たせるも何も、古川先生の悔しさ思ったら、今やんなきゃみたい。そこでしゃかりきになっちゃって、先生方がなんか言ってきても、それはこうでしょって言って、もう鬼のような顔してましたね。それで、「影の専攻長」になったんですね。だから、古川先生のことになかったら「影の専攻長」にはなっていないし、こんなに長く経政にはいなかったかもしれない。

— 経政という組織が川崎さん呼び寄せたとは思えない。

川崎 でも、それは偶然だからね。ホケカンが長くなったから、そろそろ異動でってということで、経営政策に来たわけだし。

— 負担が軽いはずだったのに。

川崎 古川先生のことかなければ、その頃にはどこかに異動してたかもしれない。その後、ずっといろいろあって、高木先生が専攻長のときに SIP が始まるんです。サービス・イノベーションプロジェクト⁸。今のサービス工学が始まったのは、このプロジェクトがきっかけだった。高木先生が専攻長をされているときに、「川崎さん、こういうプロジェクトを経政でやろうと思うんだけど」って言われて。

サービス工学の原点

— これはプロジェクトだったんですか、一つの。

川崎 一つのプロジェクトで、文科省に応募して採択されたんですね⁹。これが始まったから、また事務量が増えるじゃない。それで、異動できなくなっちゃって。

ただ、社工の改組再編が決定した段階で、私は絶対に異動させるとシス情の支援室から言われました。長過ぎるということと、組織が変わるので。

— このタイミングで、経政もなくなるし。

川崎 行きたいところがあれば、希望を出してくださいってということで。

— それで、ホケカンに。

川崎 ホケカンに行きたいって言ったら、ホケカン側は早めに来いって言うことで 2014 年 7 月に保健管理センターへ異動となりました。

⁸ 「顧客志向ビジネス・イノベーションのためのサービス科学に基づく高度専門職人育成プログラムの開発」

〈https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/service/〉

※内閣府の「戦略的イノベーション創造プログラム」(SIP)とは異なる。

⁹ 2007 年度を初年度として、文科省 (2 年)・経産省 (1 年) の大型事業を受託。助教 2 名 (当初は 1 名)、事務 (非常勤) 1 名雇用。経政エリアに専用室を設置 (8A206)。

事務としての心構え

— 責任を持って、いろいろさばいていかなきゃいけないじゃないですか。そういうときの心構えとあってありますか。

川崎 心構え。

— 人付き合いでも、自分の機嫌の取り方でも、周囲に対して気を付けてたことみたいな。

川崎 人に迷惑掛けるの嫌だからね。

— 引き受けたことは、自分で。

川崎 そう。人に頼むぐら이었다ら、自分でやっちゃったほうが早いって。

— そういうふうに話せるのが、本当にすごいです。

川崎 いや、こなし切れてなかったかもしれない。

— 専攻長とか研究科長以外の先生方との関わりも多かったんですか。

川崎 非常勤講師の世話人をやってる先生とかね。経政は非常勤講師が多いから。カリキュラム委員会とかも絡んでくるし。

— そっか。事務はいろんなところとですよ。

川崎 そう。だから、支援室と仲良くするとかね、先生と仲良くするとかね。たとえ先生方に、川崎さん、やり過ぎとか言われても、憎らしいこと言われても、一応お仕事ですから、はいはいってやるっていう。だけど、とある先生に言わせると、川崎さんは先生によって態度が違うと言われたり。

— そうなんですか。人間だからいいんじゃないですか。

川崎 しょうがない。万人受けするような仕事ってないじゃない。全ての人が OK っていう仕事はないから、何がしか仕事をやっていると、誰かには評価されない代わりに、別の誰かには評価されたりとか。それはね、しょうがないことであって。ただ自分としては、人に迷惑を掛けたくない。自分で担当してるのは責任持ってやらないと気が済まない。

— 単純な疑問なんですけど、先生方とかと飲み行ったりとかってのもあったんですか。吉田先生とか、秘書さんとかでも。

川崎 ほとんどなかった。私、お酒飲めないし。社工の先生方のパーティー、懇談会があっても、別に経政は呼ばれないし。でも、2014 年度から社工事務室になってからは、社工の方に呼ばれることはあったけど。

— 川崎さん、愛されていますね。

川崎 この前、(2018 年)3 月末に、社工の送別会に呼ばれました。東大に行かれた吉野(邦彦)先生もいらしてて、経政出てもう何年も経ってるのに呼ばれちゃったんですよって。一言お願いされたので出てって、どうもありがとうございましたって言って、最後のあいさつしたの「健康診断、受けましょう」って。

— 健診(笑) いや、大事ですけど。最後の挨拶で。

川崎 (退職時の)どの送別会でも、「健康診断、受けましょう」が締め挨拶。

— 呼ばれるのとか、お話も含めてかっこいいです。

川崎 このインタビューではいい話しかしてないから。川崎に腹を立てていた人は、多分いっぱいいる。时期的に、一時的に思ったり、普段はどうも思ってたなくても、あのとき腹立ってたなっていう人は、多分いっぱいいると思う。そういうもんですよ、仕事って。多分、仕事やってると、いろんなことがあるけども、卒業するときに笑顔でさようならって言えればいいかなと。ホケカンを卒業(退職)するときも、いろいろあったけど、ハッピーリタイアメントで「皆さん、ありがとうございました、みんな元気でね！」と、笑顔で卒業しました。

【付録】 経営・政策科学専攻のあゆみ

- 1976年(昭和51年) 独立修士課程研究科 経営・政策科学研究科経営・政策科学専攻開設
- 1989年(昭和64年) 経営システム科学専攻(修士課程。東京キャンパス)開設
その後、東京キャンパスに企業法学専攻・企業科学専攻が開設
- 2000年(平成12年) 同窓会「経政会」が設立される(現在は「筑波社工会」に一本化)
- 2001年(平成13年) ビジネス科学研究科(夜間社会人大学院。東京キャンパス)と
経営・政策科学研究科(筑波地区)に分離
経政専攻は、「MBA」、「ビジネス情報数理」、「社会経済システム」、「都市計画」の
コース制を導入
- 2003年(平成15年) 修士(公共政策)を追加(Master of Public Policy, MPP)
その後、MBA/MPPのいずれかのコースを選択する制度に変更
- 2005年(平成17年) システム情報工学研究科経営・政策科学専攻に改組
- 2013年(平成25年) 経政専攻最後の入学者を迎える

表 経政の事務職員(8A棟3階)・技術職員(8A棟2階) (川崎さんが在籍していた期間のみ)

年度	組織	組織長 (敬称略)	事務		技術	メモ
			常勤	非常勤	常勤	
2002	研究科	松田紀之	2	1	2	
2003		糸井川栄一	2	1	2	
2004			2	1	2	
2005	研究科 ／専攻	古川俊一	1	2	2	
2006	専攻	高木英明	1	2	1	4・5月は専攻長代行・代理が立てられた
2007			1	2	1	
2008			1	2	1	
2009		吉田あつし	1	3	1	非常勤職員の人数増(※)
2010			1	3	1	
2011		浅野哲	1	3	0	技術職員は8A棟から3B棟に集約
2012			1	3	0	
2013		吉瀬章子	1	3	0	
2014			1	3	0	新・社工事務室(3C棟3階)に引越 最後の学年が修了(留年者を除く)

注 川崎さんが個人で作成されたもので、公式情報ではありません。記憶違いの部分があるかもしれないとのことです。

※ 吉田専攻長の発案で、非常勤職員が子育て・介護等により休んでも他の職員がカバーしやすいように、時間枠はそのままで人数を増加(一人当たり時間数は減)。